



# メディアキッズ通信

VOL. 2

発行 特定非営利活動法人子ども文化コミュニティメディアキッズ 編集メディアキッズ 発行責任者 山口 恵  
〒815-0032 福岡市南区塩原3-22-1 201NPO法人子ども文化コミュニティ TEL 092-552-1540 FAX 092-561-9840  
E-mail info@kodomo-abc.org URL http://www.kodomo-abc.org



## 旅する絵本カーニバル2006 in アクロス福岡 特集

NPO法人子ども文化コミュニティと九州大学ユーザサイエンス機構 子どもプロジェクト、西日本新聞社、C、E、ワークスが主催、(財)アクロス福岡が共催の『旅する絵本カーニバルinアクロス福岡』が2006年3月24日(金)～4月2日(日)アクロス福岡、2F交流ギャラリーで行われました。

今回の絵本カーニバルは「まるで旅するよう絵本に出会う」をコンセプトに、選りすぐった1500冊の絵本の展示と豪華で楽しいゲストを招いての特別企画や「絵本を楽しむ・絵本と出会うワークショップ」など絵本をめぐる様々な体験を通し、親子のコミュニケーションが深まることを目指して開催されました。

### 「絵本カーニバル2006 inアクロス」



3月24日アクロス福岡で絵本カーニバルが行われました。たくさん絵本があり、絵本カーニバルでは、絵本の展示のほかに、絵本にちなんだワークショップが行われました。絵本型のクッキーを作ったり、日本でも初めてリンドクレイ賞を受賞した荒井良二さんのワークショップ、折り紙、王冠を作るワークショップには絵本がおしゃれに展示され、座りやすそうなイスや遊びたくなるようなイス、木馬や木のおもちゃも並べられていました。お母さんに絵本を読んでもらう人やゆらゆらゆれるイスに座りながら読む人など、みんなおもしろい体勢で、絵本を読んできました。(文 森崎 友香 小学6年)

### 絵本を使ったワークショップ 「絵本作家荒井良二さんの絵本から飛び出したびよ～んなOO！」

会場：九州大学USIサテライト ルネット1F(福岡市南区大橋)

「大橋に森をつくる」  
一月中旬から三月上旬にかけて6回シリーズで荒井良二さんの絵本を使ったワークショップが行われました。音を作るワークショップや枕カバーに夢の絵を描くワークショップ、中でも一番印象に残っているのは「森の絵本」を読んでもらって自分の行きたいと思う森の絵を模造紙に描き、大きな大きな森を作るワークショップです。



小学校一年生から大人まで描く絵は様々。みんなとても大胆で、楽しそうでした。描き上がったみんなの絵をコラージュ(切り貼り)したりしてひとつの大きな森を作りました。最初は「変な絵になつたらどうしよう」と心配しましたが、全員で「ここに空が欲しい」とか、「道を書こう」とか工夫して、出来上がったみると本当の大きな森みたいになったので感動しました。最後にその大きな森を背景に荒井良二さんの絵本そのつもりをつけて、自分たちの創作人形劇そのつもりを演じました。

#### 編集後記

☆絵本の力は凄いなと思いました。絵本は素晴らしいと思います。 森崎 友香(小学6年)  
☆荒井良二さんのことばを記事に書くのが難しかったけれど、うまくかけてよかったです。 山口 麗(中学1年)  
☆荒井良二さんは気さくで、おもしろい方でした。とても取材しやすかったです。 末松 由都(中学2年)  
☆文を書くのが苦手なので、決められた字数で記事を書くのが大変だったけれど、良い経験になりました。 岸田 優治(中学3年)

### 「絵本作家 荒井良二さんとワークショップ」

荒井良二さんは始めに、「今日「墨」を使うこと、「習字」をするわけではない」ということを説明しました。そして「お手本」を書き始め、私たちはそれが「作品」になるまで見ていました。一年生は早く書きたいと言いつつ、荒井良二さんは「作戦だよ」と言っただけで「お手本」に集中し続けました。待ちくたされたころ「筆」を作ることになりました。この筆というのは、百四十センチくらい竹ざおに、各自おもしろい刷毛、スポンジ、歯ブラシ、麻のひも等を貼り付けます。麻のひもに歯ブラシをぶら下げたものや、納豆のパックをつけたものなど、ユニークなものも出てきました。荒井良二さんは「それだけで作品になる」と笑っていました。



いよいよ創作開始です。8メートルの巨大な紙が用意され、3グループに分かれて紙を取り囲みました。始めは荒井良二さんの言ったイメージに沿って、次は「森」そびました。私は絵を描いてたという感覚は無く、ただ思ったように墨を塗ったという感じでした。

一番激しい人で、8メートルの紙の上を全力ダッシュで1本線を引くみんなにびっくりされていました。私は花を花を描きました。朱の花に墨でマールをつける。これがなかなかおもしろく、最後まで熱中していました。私は音絵巻を描けたいけれどなかなか描けないタイプですが墨だと不思議に筆が進んでしまえば3時間のワークショップがとて短いものに感じられたほどでした。荒井良二も不思議に思っただけで、ワークショップを企画したそうです。荒井良二さんは「これから墨の不思議について考えていきたい」と話していました。

私もこのワークショップに参加して、同じ事を考えていたのでびっくりしました。また荒井良二さんに会う機会があれば、墨の不思議についてお話したいと思いました。(文 末松 由都 中学2年)

### 「荒井良二さんにインタビュー」

僕たちは3月28日に行われた「荒井良二さんとワークショップ」に参加した後、荒井良二さんにインタビューをしました。まず今日のワークショップについて聞きまし。テーマは、以前から考えをためていた「墨」。今回のような大きなワークショップ(参加者20名8メートルの紙を使う)が初めてだったそうです。なぜ墨を使ったのかという絵の具だとなかなか絵が書か出せない人がいるけれど、墨のついた筆を持つと頭で考えるより先に手が「描く」ということを覚えていて「動いてしまはなせなんだろうと考える体験をしてほしかったからだと思います。



荒井良二さんは絵本作家になるうと思ったことは一度も無いそう。実は絵本のストーリーも作るうとしていないのだそうです。ただ絵本のことはいつも考えていると話していました。荒井良二さんは、小学校のころはことばで表現できない子どもが描くことを「一番得意だった」と、絵で描くと、しゃべらなくてもみんなが理解してくれたのでとても助かったと話してくださいます。

荒井良二さんは34歳で始めて絵本を作ったそうです。それまでは「今でもイラストレーターの仕事をやっている」でも忙しくて病気になることもあったのだそうです。絵本を描くとすごく楽になって、病氣もどんどんよくなっていき、絵を描くことになって、どんどん元の自分に戻っていったのだそうです。そのことが今でも絵を描いてきて一番印象に残っているのだそうです。

最後に読者に向けてメッセージをお願いします。「絵本は子どものものとか、幼稚なものとか、考えないでほしい。子どもも大人も楽しめるから。」ということでした。荒井良二さんはとても明るくて優しい人でした。(文 山口 麗 中学1年)